虞美人草

大塚 楠緒子

おれも娘を三人もっているから、めでたく君が凱旋してきたら、ひとつ選り取りにしてもらおうか、と正しくも父少将の声で来客に語っている言葉を、ちょっと聞きかすったはいちばん年かさの令嬢久江であった、おりしも東亜の風雲は日に日に急で、海にも山にも殺気が満ちている頃で、リョウマチに悩んで立たれぬ少将は、出征のいとま乞いにきた少壮の海軍士官に向かって、憤慨の意気に燃えて必ず負けるな勝って帰れを繰り返すと、必ず勝って帰りまするとの士官も誓って答えたその宵である。

久江は再びこう繰り返してみる、おれも娘を三人もっているから……ひとつ選り取りにしてもらおうか……娘といえば自分たち三人であるが、自分が今年十九で妹の駒江が十七、次の妹の末子はまだ十二だから数にはならぬ選り取りにもし桂吾様がお嫁になさろうなら、私と駒江さんとの二人のうちに決まっている、

数にはならぬと久江は思っているが、十二の末子までが、桂様桂様と来るといつも桂吾につきまとうて離れぬので、桂吾は人に好かれる質なのである、少将の家に来る客は多い、たびたび来る客も多い、そのたびたび来る客のうちでも暇さえあれば最もたびたび来るのがこの海軍士官であるが、幾度来てもそのたびたびに必ず新しく珍重されて、もて扱われる桂吾のような客はない、父少将がいつも褒める、軍人としての資格に一つも欠けたところのない、いい気性だ、いい技量をもっている、ああいう小気味のいい男も少ないという、その点は三人の令嬢にはよくはわからぬが、とにかく桂吾は風采が立派で男らしいうちにどことなく優しいところもあって、無口すぎず饒舌すぎず、趣味のある話し上手、で男といわず女といわず人をひきつける妙をもっているので、正月の元日、海軍省からずっと回って年始に来るときなんぞ金色のエポレットが先つ肩に麗しく、髯もカイゼル式に念入りに手が入れてあっていつもよりも上の方へピンと跳ねてある格好のよさ、ポケットのほとりからなんとなくいい香りがすると、末子はいち早く嗅ぎつけて桂様あたしのハンケチにもつけてきてちょうだいなと言った。

また暇があってゆっくりと日本服の着流しで来るとき、遠洋航海に出た話や外国に留学していたときの話などを始めて、海上のおもしろいことや珍しいこと、公使館の夜会の美しいこと、ドイツの皇后様を初めて見たときのこと、イタリアのピザの塔へ上ったときの話などをすると、三人の令嬢は聞き酔わされてしまう、黙って手を膝へ重ねて聞き入っているのは久江で、熱心に根を掘り葉を掘り質問を始めるのは駒江、あちらの女学生はどんなふうをしている、きっと活発で利口でしょうね、フランス語とドイツ語とどっちが難しいの、イタリア語もお使えになるの、と聞きたがるそばから、桂様は異国の言葉もわかって、と頓狂な末子が真面目くさって笑わせる。

十二の末子はまだ一人前として性格を評しえられぬが姉の久江の物事に内気な、情にもろいじきに涙をこぼす優しい性質は、その容姿にも表れているので、色白の細面で鼻のつんと高い、品のいい地味な柄を好んで少し長めに着物を着ている具合は少将の夫人によく似ている、ひきかえて駒江はまるで反対、軍人の父の気性をそっくり受け継いでいるので、淡白に快活で元気のい

3【東亜】東アジア地域を指していった言葉。この作品は明治時代後半に発表された小説で、日露戦争の頃のできごとが題材になっている。

5【エポレット】軍服の肩につけた装飾。

い、丸顔でぱっちりした目元からして万事に華美好きがわかる、それで包み隠しをせぬ臆面のない駒江のことであるから、いつか言ったことがあるとみえて、小姉様は桂様のお嫁になりたいってさ、と末子が久江に耳打ちをしにきたことがある、久江はそのときは黙って笑って聞いていたが、父の言葉もあるし自分と同じことを駒江も思っているとすると、桂様は私よりも駒江さんが好きかもしれないと、何となく運命を危ぶみ始める。

士官が少将の家にいとま乞いにきて、三人の令嬢をもっている云々を聞かされ、勇ましく出征の途に上ったのは、庭に霜柱の隙間もなく立っている頃で、盆栽や草花の鉢は残らず温室へ籠められて、勝ち誇った松がひとり庭いっぱいに幅を利かしている頃であったが、ほどなく霜柱が崩れる氷が砕ける、南の方から吹いてくるぬるい風が冷たい空気をそろそろと追いのけ始めたその間である、たちまち何十年と何百年と、いや何千年とたっても、決して消えることのない勇武絶倫の行動を我が国が世界の歴史に刻んだので、日本が勝とうか負けようかと危ぶまれていた大問題は着々解決されていく小気味よさ、各国は目を丸くしてあきれているその四月の末頃であった、植木屋が初めて温室から花壇へ出してきた鉢の虞美人草を見ると、蕾を三つもっていた、最初見つけたのは久江であった。

久江は早くも自分たち姉妹の数と虞美人草の蕾の数とを思い合わせてみる、二つの蕾をささげている茎の長さも同じほど、蕾の大きさも似たり寄ったり、その二つが自分と駒江で、も一つのずっと小さいのは末子だ、ずっと小さい蕾はまだなかなか咲くまいが、上の方に茎を伸ばしてなにか思案でもしているようにうつぶいている二つはあとさきにきっとじきに咲くにちがいない、さあその二つの蕾が二人の運命を占って咲くのではあるまいか、花が咲く、咲いたらば散ろう、散って散り残って、四枚の花びらが一ひら二ひらと散って最後の一ひらが一分でも散り遅れて一秒でも茎に長くついていたほうが、桂様のお嫁になることになる……のかもしれない、と夢見るように考えた久江は、そこで心持ち長く伸びていようかと思う茎のほうを自分の蕾と決めて、少し短いほうを駒江のと勝手に決めておく。

それかあらぬかその夕方駒江もしきりに鉢の虞美人草を眺めていた、父の言葉を聞きかすったのではないが、何事につけても敏いすばやい駒江であるから、何となく感づいて暗に姉と同じ考えを思いついて姉と同じような独断をしているらしく思われる。

ここにつらいは虞美人草である、花で占おうと姉妹に決められたその花の散りようで、可憐な二人の運命の糸を操らねばならぬ、一人の糸をつなぐには一人の糸を断たねばならぬ、苦しいではないか、暖かい空の気は伸びよ伸びよと上から茎をつまみ上げるように迫る、肥料の利いている土の温気は伸びよ伸びよと下から押し上げるようにする、時々刻々に伸びねばならぬ、伸びたらば花を咲かせねばならぬ、花が咲いたらやがて散る、散ったらば二人の運命が決まる、一人がほほえんだら一人が泣くに決まっている、それに末の妹までものけものにはならぬので、三つの蕾を見つけたとき、あら虞美人草が蕾をもっている、あたしたち姉妹の数と同じよと叫んだ、末子までなにか思っているのではあるまいかと、天地万物有情であるとしたら五風十雨にまかせてある身、咲くも散るも自分の一存にもゆかぬ虞美人草は、さぞかしはらはらと気をもんでいるにちがいない。

三人の姉妹はその鉢へ朝に夕に必ず自分の手からと思うごとく競って水をやりたがる、時によると鉢の中に洪水がみなぎることがある、そうこうするうちに二つの蕾は日ごとにふくらむ夜ごとに育つ、ほっそりと緑色の柔らかい刺に包まれている茎は、だんだん長くなって、うつぶけていた頭をしだいにあおむけてほどなく咲く身づくろいをし始めた、久江が来て見て駒江さん

のはもう蕾の先に紅をさしたように花びらが見え始めている、私のはまだ見えぬけれども後から咲いたとて先へ散ってしまうこともあろうとため息をつく、駒江は来て見て、私のが先へ咲きそうだ、けれども人だとて先へ生まれた者がきっと先へ死ぬとは限らぬ、後から咲いた花がかえって先へ散ってしまうこともあろうと、なかなかがっかりはせぬ。

日和が続く、姉妹三人は変わることもなく睦ましい、姉は無口で駒江は快活、末子はいつもちょこちょこと、袴下に着る丈の短い筒袖を着て、独楽鼠のように家内中をにこにこと飛び回っている。

そのうち紅筆の先をちょっと噛んだほどに紅をさしていた二つの蕾は、だんだん萼が緩んできて、美しくたたみ込まれている花びらが現れてくる、二分見える、三分見える、こちらのほうが色が濃い、こちらのほうが早く咲くと、無邪気な末子が評をするのが、姉妹がためには、じらされるように聞こえてよけい苦しい、それで二日たち三日たった。

またしても凄いほど勇ましい港口の閉塞をやった、誰が死んだ誰が負傷したと旅順の号外の騒がしい暮れ方であった、と見るとまだまだと思っていた虞美人草の蕾が、いつのまにかぱっちりと眠りから覚めたように咲いた、羽根のように薄い四つの花びらを開いて二つの蕾が同じ形に同じ色に花は大きくもないが、緑色ばかりの狭からぬ庭いっぱい光が射すように緋色に咲いた、二人の胸はしきりにとどろく、運命が白刃を抜いて迫るように覚える、その夜三人は部屋に集まって娘心にも熱心に我が軍の勝利を喜んだが、久江は多く語らず駒江はよく語った、しかし二人は桂吾の名を口にしなかったが、例の末子が桂様はどうしていらっしゃるだろうと切り出したので、駒江が桂吾のもとへ三人から贈り物をしようということを発議する、すぐに末子が使いになって父少将の前へうかがいに出ると、快く許されたので、それなら何をあげようと評議が

10【姉妹がためには】姉妹にとっては。

12【旅順】地名。日露戦争で激戦が繰り広げられた。

やかましくなる、駒江は鼠繻子へ真紅の牡丹を縫い出した手製の信玄袋に、自分の写真を添えようと言う、写真はついこの頃撮影した、濃い葡萄へ菖蒲を白く抜いた二枚給の振袖を着て立っている姿で、もちまえの器量よりも二倍も三倍も美しく映っている、ところが写真なんぞはやらんほうがいいと父少将に禁じられたので、駒江はすっかりがっかりしてしまう、信玄袋よりもこれが贈りたいのにと久江に気取られぬように、そっと、そっと、心の内で情けなく繰り返してみる。

末子は、あたし、桂様がお好きだから栄太楼へ甘納豆を買いにやってそれを送ってあげるとと言う、桂様よりご自分がお好きだからでしょと、はたからからかわれる、久江はあれこれと注意深く考えた末、軍艦にはこういうものが珍しかろうと、浅草海苔に玉だれ一箱、それに前もってそのつもりであったかどうだかちょうど編んであった手編みの靴下を添えることにして、明くる日さっそく品々を整えて三人の令嬢が女中を連れてわざわざ小包を出しにいった。

虞美人草はいよいよ美しく燃え立つように咲いている薄い花びらが優しく風に揺れて香を伝えると蝶が来る蜂が来る、褐色の花の芯には黄金の砂をまいたように花粉がまみれている、散りそうにも見えぬしぼみそうにも見えぬ、永久に咲いているかのように見えるが、それは若い乙女の恋も姿も永久のもののように見えると同じだ、久江も駒江も、いずれ、どちらかの花が先へ散るとあきらめているが、決して嫉妬の目で見据えてはいはせぬと、二人でたえず自分に弁解してそのけなげさを一人で誇っている。

さても夜中から雨の降り始めた夜があった、軒端に雨を投げつける風の音に、恐ろしい夢にうなされていた久江がまた驚いて目を覚ますと、隣に寝ている駒江も覚めたとみえて身じろぎをする、楽そうに眠り入っているは末子で、見ているにしてもその夢はおもしろかろう、鞠を大砲

1【鼠繻子】布地の一種。「鼠繻子へ真紅の牡丹を縫い出した」とあるのは、鼠色の繻子の生地に、真紅の糸で牡丹の花を刺繍したデザインということ。

1【信玄袋】底の平たい、布製の手提げ袋。

の中へ入れて打ってちょうだいなと、寝言を言った。
　ほどなく雨は止んだらしく夜明け近くなって、障子が白みかかるや否や、こらえきれぬように起き上がって雨戸を一枚くりあけた、久江はたちまち、
「あら！」
と叫んだ、続いて出てみた駒江も、
「まあ！」
と言ったぎり、なにかの悪い前兆がどきりと二人の心臓を打ったかのごとく、姉妹は同じように同時に切なく感じたのである。
　ちょうどそれが五月十五日、軍艦初瀬が浮流水雷にかかって沈没した日の朝であった、乗組の一人の士官も勝って帰ると少将へ誓ったその誓いを無にして、はなばなしく最期を船と共にしたその朝であった、鉢の虞美人草の二輪の花は、夜の間に後も先もなく、無残にも散ってしまっていたのである、八つの花びらは土の上にたたきつけられてしたたかに泥にまみれて、ひょろりと二つの茎ばかり悲しそうに震えて残っている、戦争に行ってもお桂吾がきっと帰ってくると信じている姉妹は、雨と風とが虞美人草をまだきにこうもみじめに散らそうとは思わなかったので、二人は涙ぐんで手を取り交わしてじっと顔を見合わせた、それで胸から胸へ、こんなにひどく花が一度に散ってしまって、これではあなたも私も、恨みっこなしに桂様のお嫁にはなれない印だわね、悲しいわね、と口には出さねど、姉妹の心は通ったのである、ほろりと涙が一つに流れた。
　残った一輪の蕾が来ん盛りを期しているがごとく、一人威勢のいいのは妹の末子で、姉様たちのは散ってしまってよ、今度咲くのはあたしの蕾よと。

〈出典『新編　日本女性文学全集　第三巻』（菁柿堂、二〇一一年）〉

【著者】大塚　楠緒子（おおつか　くすおこ）
一八七五（明治八）年―一九一〇（明治四三）年
小説家、翻訳家、歌人。東京都の生まれ。
【著書】「来賓」「水たまり」、詩「お百度詣で」など

14【まだきに】早くも。
17【出さねど】出さないが。